

鴻 koh

月刊俳句誌

令和5年5月1日発行

(毎月1日1日発行)

紙10巻第5号 価格200円

5 月号

2023



雛月の雛に泪のなかりけり

弥生三月使はぬままの筆と墨

立子の忌水かげろふとは絵空ごと

迦陵頻伽の声かも椿東風の寺

火袋に残る雨粒弥生寒

妻在らずみみづくの鳴く春の夜は

末黒野にまだ残りゐる火の匂ひ

十一万石ふかぶかと春来てゐたる

虚子の碑を即かず離れず蝶の舞ふ

一筆啓上かげろふの立つ里に来て

頬刺を焼き女手のなき暮らし

井戸端に砥石が一つ花月夜

足の爪切つて茂吉の忌の夕べ

# 一筆啓上

主宰作品

増成栗人

# 花馬酔木

副主宰作品

谷口摩耶

春禽の影騒がしく過りけり

クラッカーほろほろ崩れ冴返る

門灯の切れてしまひぬ春の宵

輝きの少し控へ目花馬酔木

落椿の上に寝そべる小犬かな

遅き日やブロッコリーを解体す

筍の天麩羅を食ぶ店の隅

おとうとは三月生まれ花に病み

長靴を洗つて干して春惜しむ

惜春の米の磨汁撒いてをり

馬酔木の花を見つけると、とても嬉しくなります。それはまるで簪（かんざし）のような形をしていて美しいのです。しかし、何故か地味で目立たない、パールがかったくすんだ白。それに名前も不思議です。調べてみると、馬が食べるとしびれて、酔ったようになるとのこと。毒があるのです。その毒は農作物の害虫駆除や牛馬の皮膚の寄生虫駆除に使われて来たそうです。馬酔木は日本固有種で、万葉集にも詠まれています。

# 俳 作品抄

## 会員選

飛梅のしきりに北野天満宮 高橋 詩  
寒日和梅ヶ枝餅の焼くを待つ 西山二三子  
林道の風吹く度に雪の舞ふ 上杉 馨  
しやくしやくと一口ごとの冬林檎 長沢ひろり  
一番に咲いて菜の花自己主張 伊藤 寛

谷口摩耶 選

## 同人選

酒蔵のカフェに二月の雪が降る 石垣真理子  
寒々と文机のあり直哉の居 山岸明子  
もぐら塚もこもこ春がすぐそこに 坂入喜代枝  
マンホールの蓋に鳥の絵沼に春 田邑利宏  
スプーンは涙のかたち春時雨 足立枝里  
立春大吉茶柱の立ち上がる 山内宏子  
塔頭の一寺にありし春の黙 藤原明美  
たんぼぼの絮が絮追ふ良寛忌 横尾がんな  
フルートとハープの夕べ春来たる 北城美佐  
月煌煌雪原青く横たはる 井上つぐみ  
建国日吹き寄せに盛る山のもの 水谷はや子

増成栗人 選



## 「亀戸・亀戸歩きあれこれ」

鈴木 崇

「鴻」誌令和五年二月号に祐森司さんの「吟行メモリー「亀戸界限」」が掲載されていた。吟行句会の様子が伝わる生き生きとしたレポートだった。

今回、その内容と重複しないように本欄視点の亀戸歩きを提案してみた。

亀戸天神は、よく知られる通り菅原道真を祀る梅や藤の名所であるが、境内には多くの石碑が点在する。芭蕉の句碑や歌川豊国の碑など見どころが多い。なかでも亀戸天神を訪れるたびに立ち止まってしまふ碑がある。「中江兆民之碑」。中江兆民は自由民権運動の理論的な指導者とされ、ルソーの『社会契約論』を紹介し「東洋のルソー」とも呼ばれる人物である。なぜ亀戸に？と思うのだが、建立発起人には板垣退助、大隈重信らが名を連ねる。さすが、東洋のルソー。碑にはひびが入り鉄枠で補強されているのは、少々痛々しい。ひびは関東大震災の影響なのかもしれない。

亀戸天神といえば「鷲替神事」が有名である。通年でも「鷲の土鈴」が社務所にて

授与されており、かわいいうデザインなのでチェックしてみたい。

普門院は亀戸七福神の一つ、毘沙門天を祀るお堂が境内にあるにもかかわらず、境内は荒れるに任せている。伊藤左平夫の墓が墓所にある。墓石の文字は洋画家・書家の中村不折の揮毫によるもので、個性的な筆跡である。不折は『野菊の墓』の口絵、装幀を手がけている。森嶋外の墓碑銘も不折の筆によるもので、明治の文学者との親交が深い。鷲谷の子規庵の向かいには不折が創設した書道博物館があるので、訪れたことのある方も多いだろう。印象的な不折の書は「新宿中村屋」の看板文字、清酒「真澄」や「日本盛」のラベルなどにも使われている。

花あしび左千夫の墓に垂れにけり

下村梅子

香取神社はスポーツ振興の神として人気がある。平将門が反乱を起こした際に、追

討使・俵藤大秀郷は香取神社に参拝し戦勝を祈願した。反乱を収めたあと、神の助けに感謝した秀郷が弓矢を「勝矢」と命名して奉納した。この由来から勝運祈願に多くのアスリートが訪れるようになった。

境内には大根の形をした「亀戸大根之碑」がある。江戸野菜の名残が偲ばれる。参道は「亀戸香取勝運商店街」として賑わっている。昭和30年代をコンセプトにした看板建築が立ち並び、レトロ口感満載。タイムスリップした気分になる。



亀戸 レトロな看板建築

「波」とは風や振動によって起こる海や川の水面の高低運動や、空間の物体の一部における振動や変化が、周囲の部分に次々に伝わっていく現象をいう。また、押し寄せるように揺れ動くものの動きや、個人ではどうしようもない変化が、代わるがわる生じることなどにも使われる単語である。

「波浪」「さざ波」「土用波」「波に乗る」などの用法がある。

波といふ波に音ある朧かな

鴻司

波

特集

## やはらかな重波の立つ遍路道

増盛業人  
林 未生

「重波」は「しきなみ」と読みます。次から次へと打ち寄せる波のことです。遍路は春の季語。ゆったりと優しい春の海です。海岸に沿った長い一本の遍路道では白衣に金剛杖のお遍路さんに出会えます。弘法大師の軌跡をたどると煩惱が消え、利益がもたらされると言われています。一人ひとりの思いは違っても、願いや自分探しの為にこの厳しい旅を選んだのでしょう。長い道のりには過去の事が重波のように次から次へ思い出されます。私の母も巡礼をした事があります。早朝のお寺の石段を登ってゆくと、深閑とした境内の荘厳さに感激したと話してくれました。があります。その時の八十八ヶ寺の御朱印を掛軸にしてくれました。きつても、この句にある同じ道を穏やかな海を見ながら歩いたこと。

## 「波の一句」特集

「波」を詠んだ自分の俳句、または「波」が詠まれた愛誦の句と、その句についてのエピソードや、俳句のなかでの「波」について語っていただきました。

四国の春の明るい陽光と、穏やかな太平洋の大きな景が見えました。

## 鉄橋に波の歯みつゝ雪解川

杉良介  
小澤 兀

俳人協会編・自註現代俳句シリーズ掲載 平成十九年の一句師の郷里、岐阜から富山に至る高山線に沿つ飛騨川からの景なのであるが、平素は旅人の眼を楽しませてくれるその流れが、一度雪解けときであったのだ。流木などを巻き込みながらの激流が鉄橋の橋脚にあたかも「波の歯みつゝ」ように打ち当たっているさまが轟音とともに聞こえる驚愕と感動に作者を描きだっている景なのだ。まさしく「リアリティー」溢れる表現である。五月の連休に妻の郷里、青森から白神山地を訪れたところがあるが、雪解けときでもあったので山間から轟々と樹木を押し流す奔流に圧倒された体験を彷彿とさせてくれる。

俳句の基本要素の中に「リアリズム」が求められているが、そのリアリズムを捉える感動のセンサーを常に働かせておくことの大切さを改めて考えさせてくれた一句なのではある。

## うりずんや波ともならず海ゆれて 正木ゆづ子

榎尾麻衣

昭和二十七年熊本県生まれ。昭和四十八年より能村登四郎に師事。

句集に『水晶体』『静かな水』。うりずんとは、沖縄の古語で旧暦二月の麦の穂の出る頃やそれ南風が吹き始める。

春の海は、明るくやわらかな日差しが降りそそぎ、のたりのたりに揺れる様は、春の訪れを待つ人々に希望や癒しを与えてくれます。

私が沖縄を訪れた時は、寒波襲来に遭遇し暖かな南国の雰囲気を楽しむことが叶いませんでした。しかし首里城、桜、水族館等楽しみ、一方では沖縄の悲しい歴史、現在に至る苦しみを知る旅でした。

帰りの飛行機では真っ青に広がる海を見ることが出来ました。

## 遠く遠く恋が見ゆるよ冬の波

鈴木真砂女  
本田豊明

真砂女は生涯に七冊の句集を出している。千葉県鴨川市の浜宮ち故か海に纏わる句が多い。中でも「冬の波」が十数句詠まれている。そして恋句もかなり多く、味わい深い。

掲句は平成二年の作句。冬の波の海辺に八十四歳の身を置き、思ひ巡りし遠くを恋はよ。

妻子がある事を知りながら、且つ自身も妻の立場にありながら七歳年下の青年士官に恋をする。ひびく会つゝ為家出をし、九州長崎まで「靴」を持って会いに行くまでの、若き日の恋愛事情が

想起される。のちは当然の如く、当人達及び彼女の家族との離別を迎え、まさに「冬の波」に身を晒すこととなる。

彼女の恋の遍歴は小説『天衣無縫(羽衣文雄傳)』(1919年華やかと瀬戸内寂聴著)に、モデルとして描かれている。恋に忠実に生き、た人生を平坦巨つ深くその多くを俳句を通して表現して来た。恋句を詠んでは文流俳人の筆頭ではなかつたか。

## 波が来て海月にまよとうしらかな

後藤兼志  
伊藤 隆

大学四年の夏、教員採用試験で五十メートル平泳ぎという、今思つて不思議な試験があったため、練習のつもりで、二見ヶ浦に海水浴へ出向きました。浅瀬にところで海月が出没して、刺されないように避けて泳いだものです。

兼志さんは、巧みに海月の姿を捉えました。動きがなければ海月の「まよとうし」を捉えがたいのです。そこに、「波」を登場させ、海月の姿をはつきりさせました。海月にむける兼志さんのおまよせしとよせにあのゆつたりとした語り口調が蘇ってきます。

結局、平泳ぎは五十メートル泳げたけれど、残念ながら二次試験は不合格となった夏。海月を避けるように泳いでいた二代前半の私の後ろ姿も、夏の光のなかで、人生に迷つたゆつたにたゆつていました。

茶庵閑話 69



<http://www.haisi.com/koh/index.htm>

俳誌のサロン



羽音集

谷口摩耶 選



ポケットにキャラメルのあり探梅行  
道祖神左義長の煤纏ひある  
飛梅のしきりに北野天満宮  
山門の梅の蕾に雨の粒  
裏木戸の前の小さき露の臺  
衾雪畦道辿る農夫かな  
レコードに耽りし旅や寒昂  
嬉野の湯に安まりて春近し  
寒日和梅ヶ枝餅の焼くを待つ  
冬ぬくし水の焔めく遠江  
食卓に鬼打つ豆の研ふたつ  
やうやくに吹雪おさまる気配して  
新芽吹く日差し強きあたりから  
林道の風吹く度に雪の舞ふ  
春めきて遠く近くに鶯の声  
あらたまの諏訪の社に鳥の声  
初空の揺れある紙垂のうつくしき  
しやくしやくと一口ごとの冬林檎  
寒椿落ちたるあとの静寂かな  
寒月よたつた一人の靴の音

柏 高橋 詩

豊橋 西山三子

札幌 上杉 馨

流山 長沢ひろり

俳誌のサロン